

第23回

第3章 現代を生きる人間の倫理

本来の自己を求めて

今回学ぶこと

理性への信頼にもとづいて形成された近代社会の負の側面について考え、理性中心の近代人のあり方を批判する実存主義の思想について理解を深める。そして、実存主義の先駆者キルケゴールの思想を通じて、真に個性的な生き方について考え、ニーチェの思想を通じて、自らの運命を愛する力強い生き方について考える。また、精神分析の創始者フロイトの思想から、人間の心の深層に関する古典的な理論を学び、本来の自己のあり方について思索を深める。



講師

小林和久

■ ■ キルケゴールの思想 ～絶望を受け入れて～ ■ ■

西洋の近代という時代は、人間が持つ理性への信頼に基づいて科学を発展させ、市民社会を確立させていった。しかし、そこでは人間が歯車のように扱われたり、さまざまな差別があったり、まだなお多くの不自由や不平等があった。そのような時代状況の中で、19世紀半ばから理性中心の考え方に疑問をもつ思想があらわれる。その一つ、実存主義は、人間が個性を失い画一化している状況を批判し、本来の自己を求めて主体性を回復することをめざした。「実存」とは、「現実存在」「真実存在」の意味で、個別的で具体的な自分自身を意味している。

実存主義の祖とされるデンマークのキルケゴールは、人間にとって必要なのは、理性で得られる客観的な真理ではなく、自分だけの生きがいになる理念であり、自分そのために生きそのために死んでいけるような真理、すなわち「主体的真理」であると考えた。そして、人間の真実のあり方、すなわち「実存」は、絶望をきっかけにして、快楽にふける美的実存から、道徳的に生きようとする倫理実存、さらに、神の前に一人で信仰に生きる決意をする宗教的実存へと深まる、という。このように、彼が考えた真実の自己のあり方は、絶望を受け入れて神の前に孤独に生きる「単独者」というあり方だった。

■ ■ ニーチェの思想 ～君自身となれ～ ■ ■

ドイツの哲学者ニーチェは、社会の合理化が進んでいった19世紀のヨーロッパを、伝統的なキリスト教信仰が失われ、生きる目的が見つげにくい時代とみなし、ニヒリズム

ム（虚無主義）の時代だと考える。その状況をさして「神は死んだ」と説き、キリスト教で重んじられる隣人愛や同情などの道徳を「奴隷の道徳」と否定した。

というのも、キリスト教道徳は、この世で勝ちあがれない弱者が、神や来世で救われるように自分の弱い状況を正当化するための道徳であり、弱者の強者に対する「恨み」の感情から創られたものだからである。そして、キリスト教道徳に代わって、人間一人一人が、より強くなろうとする力への意志をもって、自己の運命を愛し力強く生きる「超人」になることが必要であると説いた。つまり、どんな運命でも「君自身となれ」という呼びかけだと受けとめて、強く生きることを求めたのだった。

■ フロイトの思想 ～心の深層～ ■

オーストリアの精神科医だったフロイトは、神経症の治療をする中で、人間は、意識することが苦痛になるような欲望や過去の体験を、無意識の世界に抑圧していると考えた。この無意識という心の深層を、フロイトは「エス」と呼び、快楽を求めるものだと説く。そして、「エス」の衝動を抑える道徳的な良心を「スーパーエゴ（超自我）」と呼び、両者の間にあって現実的な調整をするのが「エゴ（自我）」だと考えた。この調整がうまくいかないと、エゴは安定を失って、心身によくはない反応が現れたり、神経症になったりする、という。フロイトの理論は「精神分析学」と呼ばれ、その後のさまざまな学問に影響を与えた。

◆ コラム ◆

ニーチェの言葉は力強い格言めいたものが多く、現在でもさまざまな解説書などが出版されています。しかし、誤解や曲解も昔から多く、ナチス・ドイツに利用されたことが有名です。

ニーチェは44歳で精神病院に入院し、55歳で亡くなりますが、独身だった彼は入院してからは二つ年下の妹エリーザベットの看護を受けます。エリーザベトはニーチェの手紙や遺稿に手を加えたりしたそうですが、強い反ユダヤ主義者であり、後にはナチスの支援者となります。そして、ニーチェの名声をナチスに利用させることになったそうです。

しかし、現在では、ニーチェの思想はナチスを補強するようなものではなく、むしろ反ユダヤ主義を批判するものであると理解されています。